



ようこそ！ 土田城へ

18

織田信長の母・土田御前の回想

天正十年（1582年）六月、
我が子・信長が珍しく濃姫を伴っ
て上洛しました。その折、私は安
土城で蘭丸の母若・妙向尼さまと、
皆の帰りをお待ちしておりました。
そこへ飛び込んでまいりましたのが
「信長さまが蘭丸らとともに、本



山麓の石碑と看板

能寺で明智さまの刃に倒れた」と
の知らせです。残された私どもは、
乱世の定めを恨み、泣き明かして、
故郷や息子たちのことを思い起こ
していました。

美濃国可児郡の土田城は、祖父
が築きました。私はその麓の館で
生まれ、父は土田政久と申します。
土田家は、古くから織田家と姻戚
関係にありました。その縁あって、
私は織田家当主・信秀さまの正
室として迎えられたのです。婚礼
の立立には、輿入れの道具を積ん
だ何隻もの船が、土田大脇の湊か
ら木曾川を下って行きました。土
田城の麓や湊の周辺には、私の大
好きなアミシレやカククリが一面に咲
き誇り、私を見送ってくれました。
天文二年（1553年）の春のこと
でございます。



山麓に残る五輪塔

翌年には信長を、次いで信行（信
勝）を授かりました。信秀さまは、
信長を那古屋城主に置き、私と
信行を連れて尾張の古渡城へ移って
しまわれました。信長は嫡男とし
て馬や弓、鉄砲、兵法などを厳し
く教え込まれました。私がそばに
居なかつたからでしょうか、優しさ
に欠け「大うつけ」と呼ばれる乱
暴な性格に育っていきました。それ
とは対照的に、信行は名行方正で
あると評判でした。

殿の華儀では、二人の振る舞いの
差は歴然でしたが、殿のご遺志に
従い、信長が家督を継ぐことにな
りました。後に兄弟の仲違いによっ
て、信行が反旗を翻すも、成敗と

なつてしまいました。
その後、信長は延暦寺や石山
本願寺を攻めたて、妹のお市を嫁
がせた浅井をも滅ぼしました。さ
らに、荒木村重が毛利へ寝返らな
いよう、荒木への人質として私を差
し出そうとしました。しかし、母
だからこそ分かるのですが、信長
は決して私を憎んでいた訳ではあ
りませんでした。

四百年余が経った今、土田御前
が毎日のように見上げた土田城は、
自然の中に埋もれてしまいました。

しかし、周辺には鳩吹山や名勝
木曾川、可児川下流域公園のカ
ククリなど、御前が慣れ親しんだ
往時の風物が、今もなお故郷の財
産として残されています。



大河ドラマ「軍師官
兵衛」で大谷直子さんが
演じた『土田御前』。実
は、土田城の姫君であつ
たとの説が有力です。
そこで今回は、私な
りに土田御前の回想録
を想い描き、歴史ロマン
に浸ってみました。

可児市長 可児信